

JFTP NEWS

Japan's Friendship Ties Programs

HIROSHIMA UNIVERSITY HOSPITAL



広島大学病院

JENESYS同窓生 エッセイコンテスト



日本国際協力センター（JICE）国際交流部は2025年6月、過去にJENESYSに参加した同窓生を対象に、初のエッセイコンテストを実施しました。テーマは「私にとってのJENESYS」。応募総数は計17か国から88作品でした。今号では、最優秀賞と優秀賞の受賞者インタビューをお届けします！

JENESYS同窓生エッセイ
コンテストの受賞作品集は
こちら→

皆さんの物語や想いをぜひ
ご覧ください。



<https://www.jice.org/exchange/info/2025/10/jenesys-aseansaarc.html>

※日本語版と英語版(原文)があります。



最優秀賞 JENESYS SAARC 2018 ビーアングリ・ロシヤンさん

What JENESYS Means to Us



特集 エッセイコンテスト受賞者の声

2025
11

最優秀賞 JENESYS SAARC 2018 ビーアングリ・ロシヤンさん(ネパール)

優秀賞 JENESYS ASEAN 2022 アウン シ チャウさん(ミャンマー)

優秀賞 JENESYS ASEAN 2010 マグフヨ・ジョン・ロジャーさん(フィリピン)

【JFTP PRESS】

カケハシの体験が本に！ 同窓生らが自費出版

ISSUE

19

No.



ネパール

ビーアングリ・ロシャンさん

Mr. BHANDARI, Roshan



「私にとってのJENESYS」

- ・ 広島大学大学院 医系科学研究科 博士課程在籍 / 循環器内科 研修医
- ・ 2018年度JENESYS SAARC参加者 (保健・スポーツを含む)
- ・ 参加当時: 大学生

国際交流が育てた医師の夢

情熱に火をつけた長崎での経験

JENESYSのおかげで、私は初めて日本を訪れました。長崎のホストファミリーはとても親切で、まるで自分の家のように居心地が良かったです。長崎原爆資料館を訪れて被爆者の方とお話したことも、深く印象に残っています。その方は当時90歳ほどで、彼との対話はとても心に響きました。

長崎大学への訪問は、私の人生を大きく変えました。日本の医学教育では研究と臨床の両方が同じように重要視されていることを知り、とても魅力的だと感じました。大学の先生方とSAARC諸国の医療課題などについて意見交換ができたことも「日本で医学を学びたい」という私の情熱に火をつけました。



▲ JENESYSで訪れた長崎市の平和公園

受賞で全てが一つの円になった

JENESYS参加後はネパールの医大を卒業して、内科医としてICUやCCU (心臓病専用の集中治療室) などの診療に従事しました。そして日本留学を目指して準備を進め、2024年4月についに国費留学生として広島大学にやってきました。現在は博士課程で心不全について研究する傍ら、循環器学の高度な臨床トレーニングを受けています。指導教官の中野由紀子教授をはじめ、他の指導教官や同僚の医師は本当に思いやりに溢れた方々で、広島で素晴らしい日々を過ごせています。

JENESYSエッセイコンテストの最優秀賞受賞の知らせを聞いたとき、喜びと感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。若い医学生としてJENESYSに参加し、今では日本の大学で学ぶ立場になり、さらに最初のきっかけであるJENESYSに恩返しする機会を得たことは、まるで「これまでの出来事が全てつながり、一つの円になった瞬間」のようでした。私にとってJENESYSは「変化」であり「つながり」であり、国境や分野を超えて理解と協力の架け橋を築くことです。

将来、ネパールで心臓疾患の治療・研究を行う医療センターを開設したいと考えています。医療においても、また人との交流においても、ネパールと日本が絆を深めていける場を作ることが、私の人生の目標です。



▲参加者のみんなと浴衣体験



▲留学している広島大学の大学病院で



優秀賞

「JENESYSが私に与えてくれた世界とのつながりと、地域を支える志」

Mr. Aung Si Kyaw

アウン シ チャウ さん



ミャンマー

- ・立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部 在籍
- ・2020年度JENESYS オンライン(青少年スポーツ交流・ラグビー)、2022年度JENESYS招へいプログラム(日ASEAN開発協力の歩み) 参加者
- ・参加当時:大学生



優秀賞

「より良い変化を目指して!」

Mr. MAGHUYOP, John Roger

マグフヨ・ジョン・ロジャー さん



フィリピン

- ・ザビエルスクール(XAVIER SCHOOL) 国際プログラムコーディネーター
- ・2010年度JENESYS参加者
- ・参加当時:大学生



JENESYSが繋いだ日本留学への道

新型コロナウイルスが流行していた頃、ミャンマーの大学に在籍していました。しかし国の政情不安で学業を続けることが難しく、日本の大学について知りたいと思っていた時にJENESYSに出会いました。プログラムはオンラインのみでしたが、これがきっかけで2023年1月に対面の招へいプログラムに参加でき、初めて日本を訪れることができました。

プログラムで最も印象に残ったのは、平和構築における若者の役割について議論した時のことです。私は世代を超えて民族や宗教の対立が続いてきた故郷のラカイン州について話しました。ほかの参加者は哀れみではなく、温かい関心と共感をもって耳を傾けてくれました。そして彼ら自身の国の実情も共有してくれたのです。その瞬間、私たちは異なる背景を持ちながら互いに支え合えると気づきました。

JENESYSの経験は、私の進路を大きく変えました。日本の印象が素晴らしく、参加者やスタッフから多くのアドバイスをもらったことが、今の日本での大学生活につながっています。現在は留学生が多い国際的な環境で学びながら、オンラインでミャンマーの若者支援活動を続けています。

エッセイコンテストで賞をもらえるとは思っていませんでした。ただ、JENESYSがいかに私の人生を変えてくれたかを伝えたくて応募しました。その中で優秀賞に選んでいただけたことは、本当に光栄で嬉しく思います。

▼ JENESYSで訪れた名古屋城で



受け取った経験を、今度は学生たちへ

15年前、JENESYSに手書きのエッセイで応募しました。手書きなら、私がどんな気持ちで応募したかを感じ取ってもらえると思ったんです。幼い頃から、日本の協力のできた高速道路などをマニラで目にしてきたことが、日本への興味の原点でした。

茨城でのホームステイは、まさに運命的な出会いでした。ホストファミリーの提案で寿司やラーメンを食べましたが、全てがおいしかったです。マニラに帰国してからも、連絡を取り続けていますし、2016年には日本で再会ができませんでした。ホストファミリーの姉妹に子供が生まれ、今では私は“おじさん”になりました。

JENESYSに参加した時、私たち参加者は「親善と平和の大使」と呼ばれました。フィリピンに帰国したら、他の人々に日本での体験を伝え、より良くなるための影響を周りに与える責任があると言われたのです。この使命感を、エッセイコンテストのタイトル「より良い変化を目指して!」に込めました。

現在、マニラのカトリック系男子校で国際交流プログラムコーディネーターとして働いています。この仕事ではJENESYSでの経験を直接活かしますし、日本訪問のプログラムを企画することもあります。学生には「どこへ行くかではなく、どれだけ心を開いて学ぼうとするかが大切」と、いつも伝えていきます。私自身が体験した文化を肌で感じるような経験と心の変化を学生にも味わってもらえることは、とても大きな喜びです。

▼ JENESYSで訪れた東洋大学附属牛久高校での交流の様子 ▶





バーチャル・ブリッジ賞

- ◆ CORALDE, Joshua さん (フィリピン)
2022年度JENESYS ASEAN参加者
「国境を越えた文化の架け橋：
私にとってのJENESYS」



夢追い人賞

- ◆ GARCIA, Jannie Dell さん (フィリピン)
2018年度JENESYS ASEAN参加者
「まさに『三度目の正直』」



約束の力賞

- ◆ PHOMVICHIT, Xaikhone さん (ラオス)
2022年度JENESYS ASEAN参加者
「優しさに導かれた旅」



心に響く表現賞

- ◆ YANG, Shirley さん (シンガポール)
2016年度JENESYS ASEAN参加者
「たくさんの『初めて』」

国際交流の大切さ、日本とのつながりの深さを伝える作品を、たくさんご応募いただきありがとうございました！

Pick Up Topics

JFTP PRESS

2025

11

特集号

～カケハシの体験が本に！同窓生や引率者が自費出版～

カケハシ・プロジェクト参加者や引率者が、日本での体験を本にまとめています。

2024年度にプリンセス・デリゲート招へいに参加したアレクサンドリア・モネ・エヴァース (Alexandria Monet Evers) さんは、「Japan: Cherry Blossom Program Kakehashi Project」と題して自費出版しました。写真撮影、記事の執筆のほか、誌面レイアウトまで全てを自身で行ったといいます。アレクサンドリアさんは「東京と静岡の風景や、出会った人々の写真をたくさん載せました。最後のページは、表敬訪問した英利アルフィヤ外務大臣政務官の言葉で締めくくっています。緊張するかもしれない場面でも、物事に関わることを

恐れず参加することについて、本当に良いアドバイスをいただきました」と語りました。

また、2024年度アルメニア系若手リーダー招へいで引率者だったグリゴール・ディラン・アヴァギャン (Grigor Diran Avagyan) さんは、「日本での思い出を末永く残し、両国の歴史的な絆に感謝の気持ちを込めた贈り物」として、ハードカバーの「In Awe of Japan」を制作。アルメニア難民を人道支援した渋沢栄一の記念館や京都、奈良などの訪問の様子を丁寧に伝えています。また、参加者5人の感想からは、アルメニアにルーツがある米国の若者が日本を見る視点を多角的に知ることができます。

↓ 2人の本は、以下のURLから読むことができます ↓

Japan: Cherry Blossom Program Kakehashi Project

アレクサンドリア・モネ・エヴァースさん



<https://everslexi.wixsite.com/kakehashi>



In Awe of Japan

グリゴール・ディラン・アヴァギャンさん



<https://heyzine.com/flip-book/afa146142f.html>



一般財団法人日本国際協力センター (JICE) は、省庁・関連機関、自治体、企業等からの委託を受け、世界各国と日本をつなぐ、「留学生受入支援」、「国際研修」、「国際交流」、「多文化共生」、「日本語教育」など、人材育成を中心とした国際協力事業を実施しています。

JFTP News 第19号 2025年11月28日発行

編集・発行：一般財団法人日本国際協力センター (JICE) 国際交流部
EMAIL: kokusaikoryu@jice.org

JICEについて詳細はHPをご覧ください。

<https://www.jice.org>

●本誌掲載の記事、写真などの無断転載を禁じます。
©2025 JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION CENTER

